

JSOG Newsletter

Reason for your choice

No.19
October
2016

わたしたちの医療は“新しい生命”を生み出すためのものです。ひとつでも多くの生命の誕生のために。すべての女性のために。いま、わたしたちができることを...

公益社団法人 日本産科婦人科学会
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY

産婦人科サブスペシャリティ 周産期

その道を選んだ先輩医師からみた魅力



はじめに

私は、東京多摩地区に2つある総合周産期母子医療センターの1つである、杏林大学医学部付属病院産婦人科に勤務しています。本年度で産婦人科医8年目になり、昨年、周産期新生児専門医（日本周産期・新生児医学会）を取得しました。

お産はそんなに好きではない？

「出産」というイベントは確かにとてもドラマチックで、その感動をきっかけに産科を志した産婦人科医も多いと思いますが、自分はそのうちではありませんでした。いまでも、急速遂娩（帝王切開や鉗子分娩）が必要になったらどうしよう、弛緩出血は起こらないか等、内心ドキドキしながらお産に立ち会っています。ですので、分娩が無事終わるとお母さんと赤ちゃんを祝福する気持ちも、もちろんあります。何も起こらなくて良かったと安堵する気持ちの方が大きいです。分娩は、それくらい何が起るか分からないものであり、実際起こった際には迅速に対応しなければならぬのです。

産科はたいせつなインフラ

ではなぜ、私はそんな産科を続けているのでしょうか？理由の1つは、やはりそれが必要な仕事だと思っているからです。産科が他の科と決定的に違う点は、病気が、ではない「正常な妊娠を取り扱うこと」です。



妊娠・出産を経て家族をつくる、という当たり前の活動をサポートする仕事であり、それはまるで、人々の生活を支えるインフラストラクチャーのような側面を持っていると思います。安心してお産のできる施設がない街に、はたして人は住みたいと思うでしょうか？

正常な妊娠・分娩を見守り、異常が起きそうな事例には迅速に対応する。華々しさはないかもしれませんが、そうして「なにもない」妊娠・分娩を積み重ねていくことの大切さを感じられるようになってきました。また、自分自身が育った地域（多摩地区）で、自分と同じ世代の人達が家族をつくる手伝いができることにも、自分なりのやりがいを感じています。

周産期医療はチーム医療

母児ともに健康に妊娠・出産を終えてくれるのが一番良いのですが、残念ながら全ての人がそういうわけにはいきません。早産になったり、母体もともと疾患を抱えている妊娠もあります。そうした妊娠では、産科医だけでなく、小児科



医・小児外科医はもちろんのこと、助産師や保健師、MSW等のコメディカルを含め多くの職

種による継続的なサポートが必要です。妊娠・出産は新しい家族のスタートであり、われわれ産科医はそのスタートにしか携わることにはできません。それを物足りなく感じることもあるかもしれませんが、たとえ問題を抱えた妊娠であっても、妊婦とその家族が少しでも良いスタートがきれるようにするのが産科医の役割です。生まれ育って行く児とその家族を支えるチーム医療の第一走者がわれわれ産科医であり、次にバトンを渡していくという大きなやりがいのある仕事なのです。

最後に

周産期領域には、まだまだ取り組むべき問題が山積みです。早産、妊娠高血圧症、胎児発育不全などは、周産期領域のメインテーマであり続けながら、いまだにその病態解明、治療法について画期的な進歩がみられていないとは言えません。若い先生方には是非、周産期領域に興味を持っていただき、こうした問題と一緒に取り組んでいけたら素晴らしいなと思います。最後に、誤解のないよう言っておきますが、お産が大好きな人も、もちろん大歓迎です！



田中 啓
杏林大学 卒後10年目
趣味 相撲観戦
家族 妻、子供2人

第68回日本産科婦人科学会学術講演会 会長特別企画

Stump the Professors

～教授陣と知恵くらべ～
に参加して

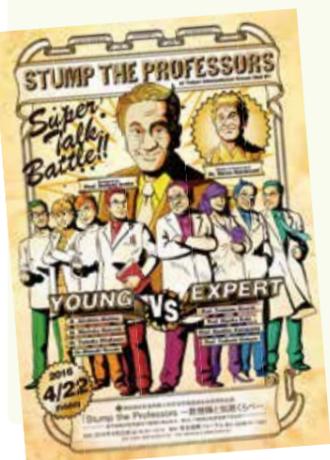
名古屋大学医学部産婦人科 西野 公博



第68回日本産科婦人科学会学術講演会において、会長特別企画「Stump the Professors」教授陣と知恵くらべ」にプレゼンターとして参加させていただきました。この企画はもともと米産科婦人科学会（American Congress of Obstetricians and Gynecologists: ACOG）のAnnual meetingで毎年行われている名物企画で、4名程度のレジデント医師が、自身が診断をつけるのが難しかった症例をクイズ形式で教授陣にプレゼンし、文字通り教授陣を困らせ、やっつけようという、米国では大変な人気がある企画です。今回、日本産科婦人科学会がこの企画を行うことになり、私と、東北大学の濱田先生、大分大学の平川先生、東京医科大学の寺田先生の計4名の若手医師軍団で教授陣に立ち向かうことになりました。

企画準備の段階では、症例の選定やプレゼンテーションの方法等についてプレゼンター同士で綿密にディスカッションを行いました。妊娠中の不全子宮破裂の症例や稀な婦人科腫瘍の症例等、各々が持ち寄った貴重な症例は分野で重複することなく、うまく散らばりました。普段行うような症例報告とはプレゼンテーションの形式が異なり、いかに矛盾なく、かつ、教授陣に答えがすぐに分らないように症例を提示すればよいか、皆腐心していました。司会進行役である京都府立医科大学・黒星先生と

もに教授陣のリアクションを想定しながら入念に打ち合わせを行い、本番を迎えました。本番当日は、とても広い企画会場と相対する教授陣の威容（鹿児島大学・堂地教授、九州大学・加藤教授、浜松医科大学・金山教授、大阪大学・木村教授）にまず圧倒されました。企画の主旨が聴衆の先生方に向く理解してもらえなかった不安でしたが、黒星先生の見事な司会により、そういった不安は一掃されました。プレゼンテーションは順調に進行し、白熱したディスカッションが展開されるなど、成功裏に企画を終了することができました。勝負の結果も我々の勝利に終わり、若手医師軍団一同安堵しました。また、内容としても決して本場米国に引けをとらないものであったと、皆様から評価をいただき、皆満足しております。



▲全文はWEBサイトに掲載しています。ぜひご覧ください！



Sessionの充実が図られ、AOFOGとのコラボにもAsianの3倍以上の英語演題が集まりました。

第68回日本産科婦人科学会学術講演会が開催されました。今回は、直前に発生した熊本地震で多大な被害が発生し、多くの会員が現地地帯で懸命に復興へ向け尽力されている中で、学術講演会と併せて「次世代への継承とStandardization」をテーマといたしました。学術講演会には技術や知識の継承とその均てん化にもつともふさわしい場の一つであります。先人たちに学び、そして未来につなげていく、そんな思いを込め、井坂恵一学術集会長のもとプログラムを進めて参りました。

学術講演会の国際化に向けてInternational Sessionの充実が図られ、AOFOGとのコラボにもAsianの3倍以上の英語演題が集まりました。



たInternational Workshop for Junior Fellowsでは、本会と交換プログラムを有する各国(米国、台湾、韓国)産婦人科団体の若手医師と本邦の若手医師とが、「帝王切開の適応と術式」「肉腫の診断」「産婦人科における当直体制」について各国の現状や問題点をディスカッションし好評を博しました。会長特別企画「Stump the Professors」教授陣と知恵くらべは、若手産婦人科医が症例提示を行い、4名の教授の先生方に診断名を当ててもらった。新たな試みでしたが、大変に難しい症例ばかりで、教授が白旗を揚げて降参する場面も見られ、会場も巻き込みながら大いに盛り上がりました。「医学生フォーラム」では、産婦人科をとりまく三つの問題「女性の社会進出とライフスタイルの多様化」「これからの産婦人科教育」「産婦人科医療施設の集約化」について全国から集まった医学生がグループディスカッションとその結果発表を行い、例年通りの高評価を得ております。一般演題として日本語の口演やポスター発表も行われましたが、前回に引き続き、ポスター発表は座長進行による発表形式

たInternational Workshop for Junior Fellowsでは、本会と交換プログラムを有する各国(米国、台湾、韓国)産婦人科団体の若手医師と本邦の若手医師とが、「帝王切開の適応と術式」「肉腫の診断」「産婦人科における当直体制」について各国の現状や問題点をディスカッションし好評を博しました。会長特別企画「Stump the Professors」教授陣と知恵くらべは、若手産婦人科医が症例提示を行い、4名の教授の先生方に診断名を当ててもらった。新たな試みでしたが、大変に難しい症例ばかりで、教授が白旗を揚げて降参する場面も見られ、会場も巻き込みながら大いに盛り上がりました。「医学生フォーラム」では、産婦人科をとりまく三つの問題「女性の社会進出とライフスタイルの多様化」「これからの産婦人科教育」「産婦人科医療施設の集約化」について全国から集まった医学生がグループディスカッションとその結果発表を行い、例年通りの高評価を得ております。一般演題として日本語の口演やポスター発表も行われましたが、前回に引き続き、ポスター発表は座長進行による発表形式

第69回学術講演会では、今回の反省点を含め皆さまからの貴重なご意見をもとに、よりブラッシュアップされたプログラムの準備が進められていることと思われま



第68回日本産科婦人科学会学術講演会報告

会期：2016年4月21〜24日
会場：東京国際フォーラム

全文はWebサイトに掲載しております。お読みください。



国内の様々な医局出身の同世代医師たちとの出会いも、本プログラムを通じて得られたことの一つです。日本を代表している自覚を持って現地の方々と対等に会話し、他国との架け橋になる努力を怠らない若手医師たちの姿勢には、大変な刺激を受けました。他国と比べ発言力が弱いとみなされがちな日本ですが、決して負けないと心から感じる1週間でした。
(慶應義塾大学 飯田美穂)



アメリカの12地区それぞれに所属するレジデントたちの代表として選ばれたPresident reporterたちと一緒に受けたレクチャーの内容は、どうして自分がここにいるのか、医師として働いていることの意義、自分の人生における優先度の高いものは何かを考えてみようという内容だった。何人かのレジデントたちと知り合いになり、直接話をする機会を得た。彼らと直接話をする機会があったのは大変勉強になった。
(横浜市立大学 中島文香)



日米若手医師交換プログラム参加体験記

The American College of Obstetricians and Gynecologists

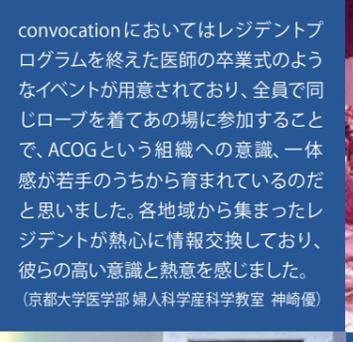
ACOG

米国产科婦人科学会

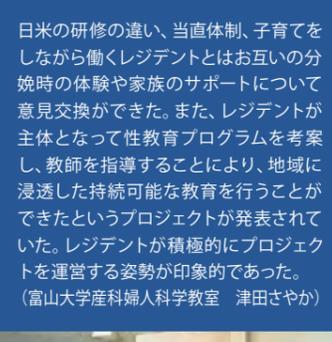
日本産婦人科学会の若手医師育成プログラムの企画として、2016年5月14日から17日まで米国サンフランシスコで開催された米国产科婦人科学会(American Congress of Obstetricians and Gynecologists: ACOG)のAnnual meetingに参加させて頂きました。このプログラムは、日本と米国の若手の医師を互いの国に派遣し、交流を行うことを目的としており、日本からは6名の若手医師が参加しました。



convocationにおいてはレジデントプログラムを終えた医師の卒業式のようなイベントが用意されており、全員で同じロブを着てあの場に参加することで、ACOGという組織への意識、一体感が若手のうちから育まれているのだと思いました。各地域から集まったレジデントが熱心に情報交換しており、彼らの高い意識と熱意を感じました。
(京都大学医学部 婦人科学産科学教室 神崎優)



日米の研修の違い、当直体制、子育てをしながら働くレジデントとはお互いの分岐時の体験や家族のサポートについて意見交換ができた。また、レジデントが主体となって性教育プログラムを考案し、教師を指導することにより、地域に浸透した持続可能な教育を行うことができたというプロジェクトが発表されていた。レジデントが積極的にプロジェクトを運営する姿勢が印象的であった。
(富山大学産科婦人科学教室 津田さやか)



日本ではあまり見ない面白い企画として、テーブル毎に1つのテーマと1人のエキスパートが配置されそこで少人数のグループディスカッションを行いながら昼食を取るというものがありませんが少人数ならではの密な話もできることから有意義ではないかと思われました。
(東京医科歯科大学 中筋貴史)



ジョージワシントン記念病院の見学は現地の産婦人科医の仕事のペースが分かり非常に参考になった。やはり3500件の分娩を年間扱うに当たっては50人の産婦人科医が必要であるということを感じた。また、ドクターフィーで1件の分娩当たり4000ドルが支払われることもやはり日本と大きく違うと感じた。
(東京大学医学部附属病院 佐山晴亮)



産婦人科では内科治療と外科治療の両方が出来ること、患者さんの年齢層が若年者から高齢者まで幅広く、女性の一生をサポートできる診療科ということに魅力を感じました。私は4月から産婦人科で6ヶ月間研修する、産婦人科強化コースを選択しました。4月から3ヶ月間産科をまわり、他の科では経験出来ない生命の誕生に立ち会うことが出来ました。もちろん全ての妊婦さんが幸せなお産になるわけではなく、悲しい現場も経験しました。長い妊娠経過の中で産婦人科医がいち早く母体と胎児の異常に気付いて対処していくことの重要さを改めて感じました。7月からは婦人科を3ヶ月まわります。婦人科疾患の悩みを抱えた方はたくさんいると思いますが、そういった方に寄り添い、悩みを相談しやすい医師を目指しています。



女性の一生をサポートできる診療科

九州大学病院 研修医・市丸壽姫

研修医の声

研修医の方々に、産婦人科を選んだ理由や、産婦人科に寄せる夢を語って頂きました。

私が医学を志すきっかけになったのは終末期医療への関心からで、医学部に入学してからも将来は緩和ケア医になることを漠然と考えておりました。ところが、病院実習でのお産見学が私にとって大きな分岐点となりました。わが子を命がけて産もうと頑張るお母さんと、それに答えようと大きな声をあげて啼泣する赤ちゃんの姿に心が激しく揺さぶられ、産婦人科医になろうと決意したあの日のことは今でも鮮明に思い出されます。

適切な生殖医療と、産科医療に貢献していくことは、少子高齢化に対して有効な役割を担えるものと確信しています。産婦人科医療は無数の可能性をもち、明るい未来をもたらすのだと信じて、この道に進むことを決めました。



無限の可能性と明るい未来を信じて

気仙沼市立病院 研修医・虎谷惇平

